



佐多 稲子



東 方 社 版

あねといもうと

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十八年六月二十五日発行

定価二九〇円

著者 佐多稲子

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇

発行所 東方社

振替東京五七七四番
電話大塚四一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

あねといもうと

佐
多
稲
子

目次

あねともうと	5
おもいちがい	29
きつかけ	51
若い炎	65
自分の胸	81

姉妹のまん中	お 興 津	三枚の絵葉書	身の上話	苦 勞 話	紋
201	177	161	143	121	101

装
幀

御

正

伸

あねといもうと

1
横町ではもう店が閉まつて、歳暮売出しのかざりが街燈の下で強い風に揺れていた。良枝はマフラに顔をうずめて、走るように歩いていった。彼女は自分の方が逃げて行つてゐるような気がした。何故、逃げるような気持なのかわからなかつた。本当は逆なのではないのか、本当は追つてゆくべきなのではないか。そうおもつてみるけれど、良枝は一刻も早く自分の部屋にもどりたかつた。今の感情を持ちこたえていることが精いつばい、どうかすれば、倒れてでもしまいそうな不安で、彼女は知らず知らずのうちに小走りになつていたのである。

今日、昼休みで屋上にいたとき、速見^{はやみ}がいつになく人目はばからず、というようにまつすぐ近づいてきて、

「今夜、話があるんだ」

と、妙にこわばつた表情で言つた。

良枝は、そのとたんに、身体のだこかの線がすうつと引つるような感覚になり、しかも表面はその反対に笑いかけようとして小首をかたむけた。

「あら、なんの話」

「いいから、来てくれ」

「行くわ」

優しく答えながら、そのとき良枝の唇は小さきみにふるえた。

あら、なんの話、などというのを、速見がどのように解釈したか、それはわかりはしない。が良枝は、自分のおもわざる演技にわれながらあわてていた。自分はいつたいどういうつもりなのだろう。そんな嘘の微笑などしようとして、かえつてまだまざと慄えて、速見をおこらせたかもしれないと、そのときもおもつた。だから速見のアパートの部屋へはいつたとき、良枝はもう心細い、悲しい顔をしていた。

速見はいつも良枝をむかえるときのように、小さな茶ぶ台に湯道具をそろえ、ガスストーブの上でお湯をたぎらせていた。

「寒かつたろう」

「ううん」

と、小さなおとがいを振つて、

「走つてきたから」

と言つた。

速見は良枝らしい愛らしい媚びを、ちらつと強い視線で見た。むしろ怒つているような視線であつた。良枝は速見の目をさけて、

「買つてきたわ」

と言ひ、ビルの地下で用意してきた押しずしの箱とみかんの包みを解いた。みかんが転がつて、速見の膝の前にとまつた。速見は良枝のその仕草をじいつと見ていたが、みかんを取つて茶ぶ台にのせると、

「君は、まだ何も聞かないのかい」

と言つた。良枝はふつと息をのむようにしたが、うつむいたまま押しずしの箱をあけた。そしてちよつとしてから、

「聞いているわ」

と言ふと、わきを向いて唇を噛んだ。

「僕は、今日、改めて課長から言い渡された。大阪転勤だ。辞令が出るのは、もうすぐだよ。どうする？」

「それは栄転ということでしょう」

「そんなことを言つてゐるんじゃないよ。君はどうするつて聞いてゐるんだよ」

「それはわかつてゐるわ。でも、栄転なのでしょう」

良枝はまた、速見の気をむかえるように下から見上げる首のかしげ方をした。

速見は、良枝のはぐらしに乗つて、ちよつと氣負つた言い方をした。

「そりや、僕は、左遷^{させん}されるようなことはしていないし、栄転というならば、そうかもしれん」

「よかつたわ」

良枝が、ぼやつとそう言つたとき、速見は了解に苦しむというようなもどかしさをあらわした。

「君は、それでいいのかね。僕流にそう受けとつていいんだね」

「どういうふうに？」

言葉の嘘がとおせなくなつて、速見を見ながら良枝は涙をぼろつとこぼした。

「大阪へ僕といつしよに行くだろう。丁度いい機会だ。君のことを会社にもはつきりして、大阪へ連れてゆくよ」

「行きたいなあ」

丸くあけた唇の語尾の余韻^{よゐん}がそのまま慄^{おそ}えて泣き声になつた。

「来ればいいさ」

「だけど、いつかはまた本社へ帰つてくるんでしよう」

「そんなことはわからん。もし本社へ帰つてくるなら、それまで、君は東京に残つて、待つていてもいいのかね」

「そうしてはいけないかしら」

半ば独り言みたいな頼りなさで言うのに、速見はじりじりしてくる感情を押え兼ねて言い放つた。

「人間は、いつまでも同じじゃないよ。僕だつて、どう変わるかわからんさ。げんに、今だつて僕には縁談がある」

良枝は、あつと洩れそうになつた唇をハンカチで押えて、わきを向いたまま、じいつとしていた。あつ、と声に出そうになつたのは、速見に縁談があるということにおどろいたからではなかつた。速見に縁談のあるのは知つていた。いつか前にも速見自身が、それを洩らした。良枝はただ、改めて苦痛にうめいただけである。

速見も蒼白^{しやうはく}んで、哀憐^{しやうれん}と焦燥^{しやうそう}の入^いりまじる表情になつていた。

「君だつて、いつまでも家の犠牲になつてゐることはないんだ。今まではそれを知つてゐるから何とかいい解決をと考えていたけれど、それにも君はちつとも積極的にならないんだ。僕のことをそれほど真剣に考えていないのか、とさえおもうよ。だから、問題がこんなふうに一層むつかしくなれば、僕もこれ以上、どうしていいかわからん。たとえ、何年先まで君が待つてゐると言つても、僕の方が、御先にごめん、ということになるよ。そのくらいのことは、君だつてわかるだろう」

「わかつてよ」

「わかつてゐるなら、どうするんだ」

「考える」

力が抜けたように良枝は、ぼつんと言つて無意識のままみかんをとり上げた。さくつ、さくつと皮

をむいて、丹念に、筋をとり、それをまた皮の上にのせると、黙つて速見の前においた。速見はそれを見もせず、荒^{すさ}びた息づかいを押えるように煙草の煙りを吐いた。

良枝は暫くののち言い出した。

「私は、自分が現代に生きているのかしらと、この頃本心からそうおもふことがあるの。血縁というものに、こんなにかまれるのは、私自身が弱いから？」

「ある程度、そうにちがいないね」

速見は、ずけずけと言つた。

「そうね、きつと」

良枝は速見にそう答えながら、しかも、もう心の底の方から、だつて、だつて、というおもしろい浮んでくるのを知つていた。

だから、夜更けの道をわが家へ帰つてゆきながら、良枝は走るような足つきになつてゐる。自分の心の中にはつきりしている現実から逃げるようなものだつた。速見の前でこそ、考える、といつたが、その回答は自分にはわかつてゐた。速見が大阪へ行つてしまふ、あの人がいなくなつてしまふ、その言葉が腹から突き上げてきてゐた。そのおもしろいから逃げられない、このまま逃げ終えたかつた。

良枝は自分の家にむかう小路へはいると、足を静めた。軒^{けん}燈がついている。良枝が帰るまで、いつもついている灯であつた。

「ただ今」

扉をあけて入ると、部屋の中から、はあい、と、澄んだ、高い声がした。妹の幸枝の返事であった。

「おかえんなさい。私、まだ起きていたのよ」

茶の間の炬燵の前で立ち上った幸枝は、大柄の、丸く肉のついた肩を、自分の両腕で抱き上げるようにした恰好で、にいつ、と目を細くしてほほ笑んだ。

「お母さまは？」

良枝は妹をまともに見なかった。幸枝がこんなふうに浮き浮きしているのには、一種の不安定な様相があつた。

「お母さまは、もうおやすみですわ」

「そう。幸枝さんも、はやくおやすみなさい。おそくなつてわるかつたわね」

「いいえ、ちつとも」

童女のような口つきである。良枝はそのとき幸枝のきているセーターの下のブラウスに気がついた。それは、レースの、良枝が晴着にしているブラウスであつた。そればかりでなく、速見からの贈物のブラウスであつた。

「幸枝さん、あなた私のよそゆきのブラウスを着ちやだめじゃないの。私の大切にしているものよ。」

どうしてそんなの出して着たの」

「私、とつても着たかつたの。私、これ頂こうかしら」

大柄な肩をゆすつてまた、にいつと笑つた。良枝と二つちがいおとの二十七歳、年齢相應の、しかも成熟した身体つきなのに、表情と、もの言いに、知能おとの劣つた、幼女の愛らしさがあつた。

「それはお姉さまのよそゆきよ。もう寝るんだから、脱いでね」

良枝の言い方も幼いものに言い聞かす調子になつてゐる。幸枝はそれには素直に、

「はい」

と、可憐に答えた。

良枝は、くず折れるように炬燵に坐つて突つ伏した。これが現実、これが私の現実、と、そのおもいが頭の中できくくる廻つた。

2

「おや、幸枝さん、何か……」

そう言う母親の、老衰になつていつもふるえて聞える声で、良枝は目を覚ました。晩方あけがた近くまで眠れなかつた頭が、すぐにははつきりしなかつたが、幸枝に何か言う母親の声で目を覚まされるのは毎朝のことだつた。枕元においた時計を取ると、もう起きねばならぬ時刻になつてゐる。まだ疲れが残

つていて身体が重かった。

「あら、お母さま、ホホホ」

と、幸枝の、人形が笑うならばこうもあろうかとおもわせるような、あどけない優しい笑い声が聞える。母親の孝子が台所へ出て何かしているらしい。がたがたした音がする。良枝は起き出して部屋を出た。台所から煙りが流れて、きな臭かった。

「あら、お母さま、なあに？」

良枝がおもわず大声を出すと、孝子は、へなへなと板の間に坐り込んで咳^{せき}込んだ。

「まあ、何か燃えたのね」

「お味噌汁のお鍋の上にね、おふきんをかけたままガスにかけたもんだから、おふきんが燃え出してね」

幸子は良枝の顔を見たのと、燃え出したふきんを流しに取り捨てた安心して、息づかいを押えながら肩を落として言った。

「あぶないこと、幸枝さんのしたことね」

「いいえ、私がかけておいたのがわるかったのよ」

昔は美しい人だったおもぎしが、輪廓^{りんかく}に残っているが、孝子はもう、大分猫背になつて、髪はまっ白であつた。